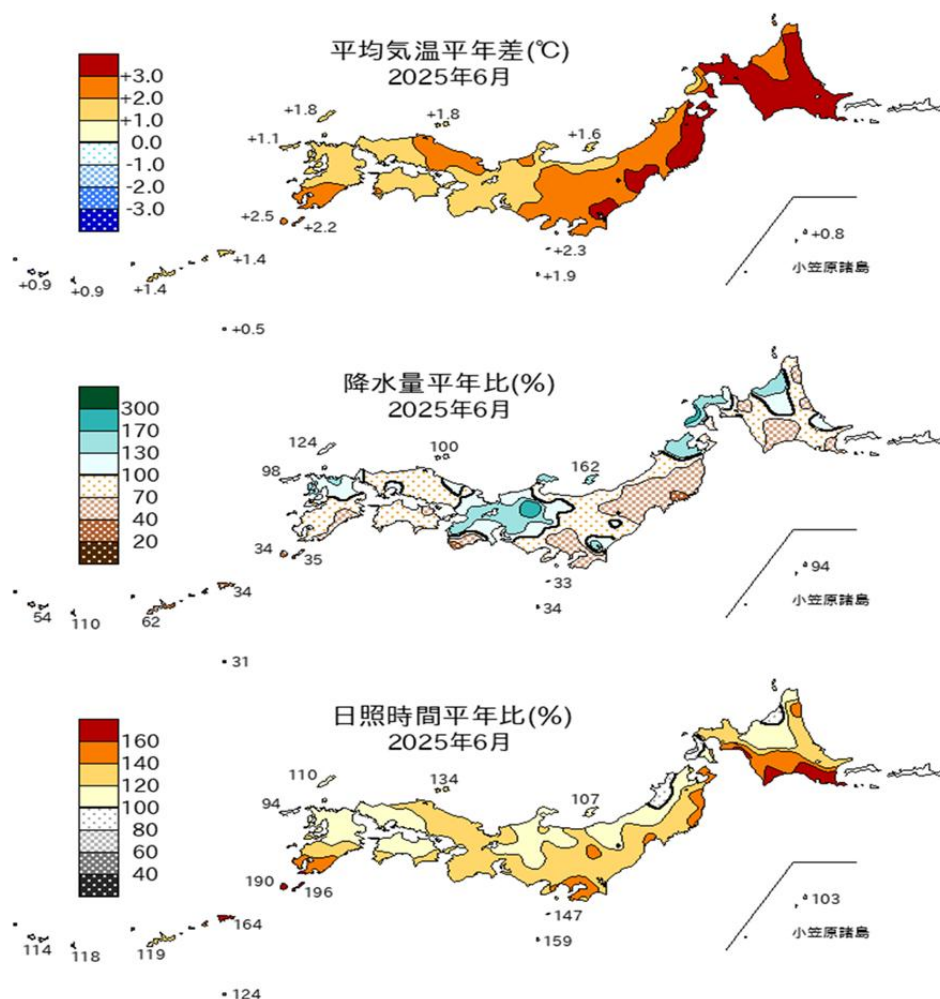


気象条件から見る 2026 年春の花粉予測検証
(令和 8 年 9 月 17 日東京都花粉症対策検討委員会資料)

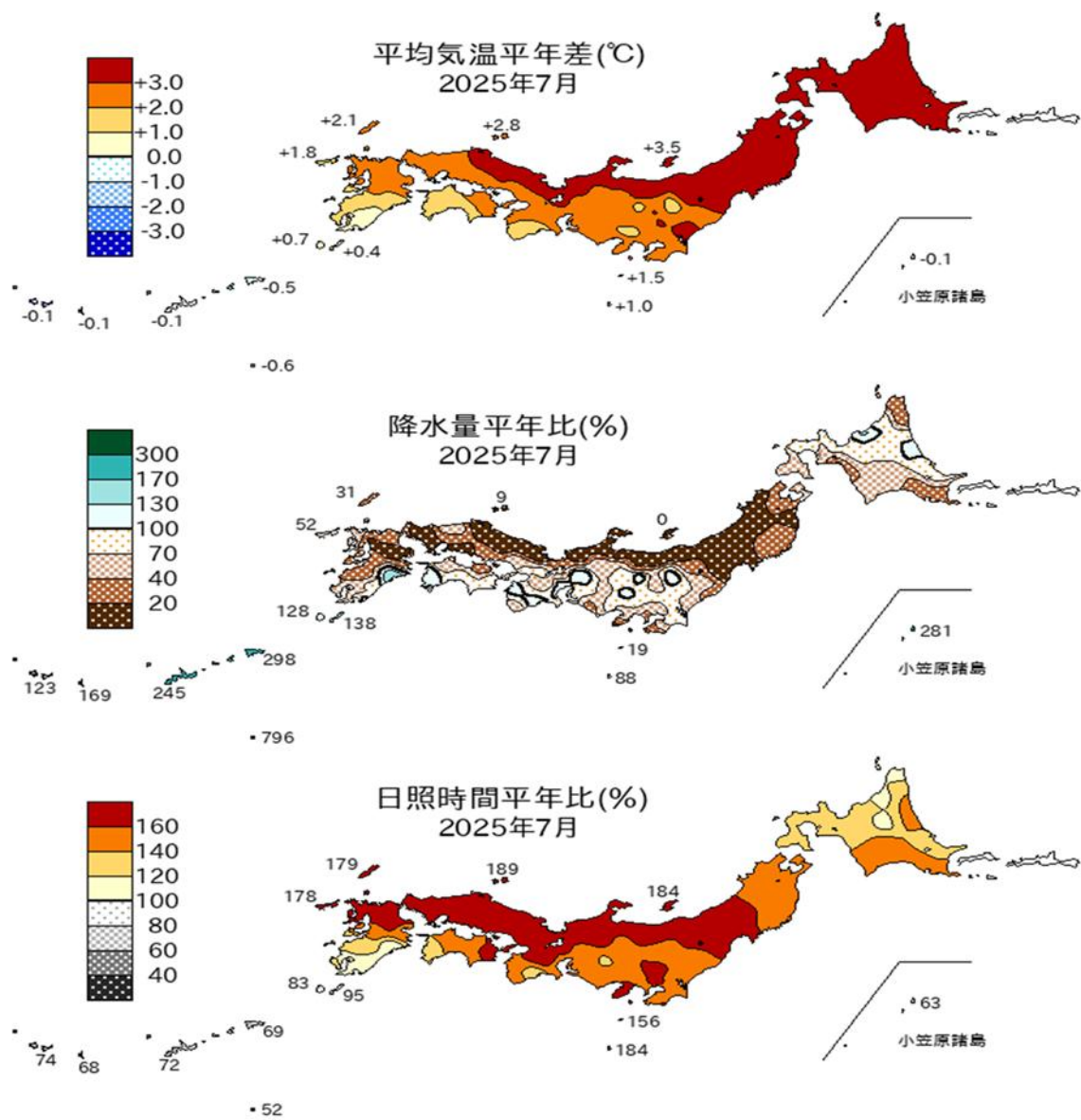
気象予報士 村山貢司

1. 令和 7 年 (2025 年) 夏の気象

スギやヒノキの花粉量に最も影響するのは前年 6 月から 7 月の気象、特に 6 月の日照時間になる。図一 1 に示すように 6 月の日照時間は関東地方では、平年より 20%以上多く、特に関東南部では平年より 40%前後多くなった。また、図一 2 に示すように 7 月の日照時間は関東地方全域で平年より 40%以上多く、東京周辺では平年より 60%以上多くなった。東京都内に影響するスギ林は東京都多摩地区、神奈川県丹沢周辺、埼玉県秩父周辺と考えられている。これらの地域の 6 月および 7 月の日照時間を表一 1 に示す。



図一 1 令和 7 年 (2025 年) 6 月の気象 (気象庁HP より引用)



図一2 令和7年（2025年）7月の気象（気象庁HPより引用）

表一1 各地の6月及び7月の日照時間

	6月日照 (時間)	前年 (時間)	平年 (時間)	平年比 (%)	7月日照 (時間)	前年 (時間)	平年 (時間)	平年比 (%)
東京	179.4	158.1	124.2	144.4	250.5	199.6	151.4	165.5
八王子	178.7	157.8	119.7	149.3	257.8	185.3	145.1	177.7
青梅	165.8	167.3	124.4	133.3	249.9	186.1	148.1	168.7
小河内	158.3	131.2	104.2	151.9	217.8	151.5	124.8	174.5
秩父	153.2	168	123	124.6	217.3	177.2	133.4	162.9
海老名	190.8	157.9	133.2	143.2	268.2	200.4	156.7	171.2

表一 1 に示すように、スギ林周辺の 6 月の日照時間について、埼玉県秩父は令和 6 年（2024 年）より少なく、東京都青梅では令和 6 年（2024 年）とほぼ同じであるが、その他の地点では令和 6 年（2024 年）より多くなった。また、平年との比較では 124.6%から 151.9%とかなり多く、7 月も平年比で 162.9%から 177.7%と非常に多くなっている。

そのため、気象条件からは令和 8 年（2026 年）のスギ花粉はかなり多くなることが予想された。

また、6 月から 7 月の高温、日照時間が多い、雨量が極めて少ないという気象条件ではヒノキの雄花が多くなっている可能性があった。実際に、都で行った花芽調査（令和 7 年（2025 年）11 月 18 日実施）において、奥多摩地区でスギ雄花を観察した際、参考として 2 地点でヒノキの雄花も観察したところ、多くの枝にヒノキの雄花が観測された。また、正式な観測ではないが実際に八王子市からあきる野市ではヒノキ雄花がかなり多くなっていた。

2. 令和 8 年（2026 年）の各地の花粉予測

都内の花粉の飛散量の予測は気象条件と前年の花粉数をベースに、関東南部のスギ雄花の調査結果を入れた重回帰式によって計算している。各県ごとのスギ雄花量と都内の花粉数の関係の計算結果、及び花粉飛散時期の晴れた日の風向は南風が多いことによると、東京への花粉の影響度は神奈川県が最も大きく、次いで東京と埼玉と考えられている。

関東南部において令和 7 年（2025 年）の 11 月から 12 月に観測されたスギ雄花調査の結果を表一 2 に示す。東京と神奈川の平均値は前年とほぼ同じ水準であり、過去 10 年の平均値との比較ではやや多くなっている。村山が独自に観測している八王子からあきる野および青梅周辺（いずれも山間部ではなく、山沿い）では林野庁の調査よりはるかに多くの雄花が見られた。実際にスギおよびヒノキの雌花による球果が 2026 年 6 月以降に大量に観測された。

表一 2 令和 7 年（2025 年）スギ雄花調査結果（環境省報道発表資料より作成）

個/㎡	令和7年 (2025年)	令和6年 (2024年)	過去10年 平均	前年差	平均差
埼玉県	5527	6308	6236	-781	-709
千葉県	9721	9903	6007	-182	3714
東京都	4938	3985	5681	953	-743
神奈川県	11074	12357	9302	-1283	1772
東京・神奈川平均	8006	8171	7492	-165	514

2026 年春の花粉予測に際しては、林野庁（実際の観測は全国林業普及協会が実施）の観測による東京都、神奈川県、埼玉県のスギ雄花の数値を用いており、多摩地区山沿いのス

ギ雄花、ヒノキ雄花は考慮していない。

奥多摩、高尾周辺、つくば周辺ではヒノキの雄花が例年より多くなっており、令和8年（2026年）春のスギ・ヒノキの合計花粉数は令和7年（2025年）よりやや多くなる可能性が高いと推定された。

表－3に2025年花粉数、2026年春のスギ・ヒノキ花粉の予測花粉数、2026年実測値および前年比、平均比、予測比を示す。

表－3 2026年の花粉予測と結果

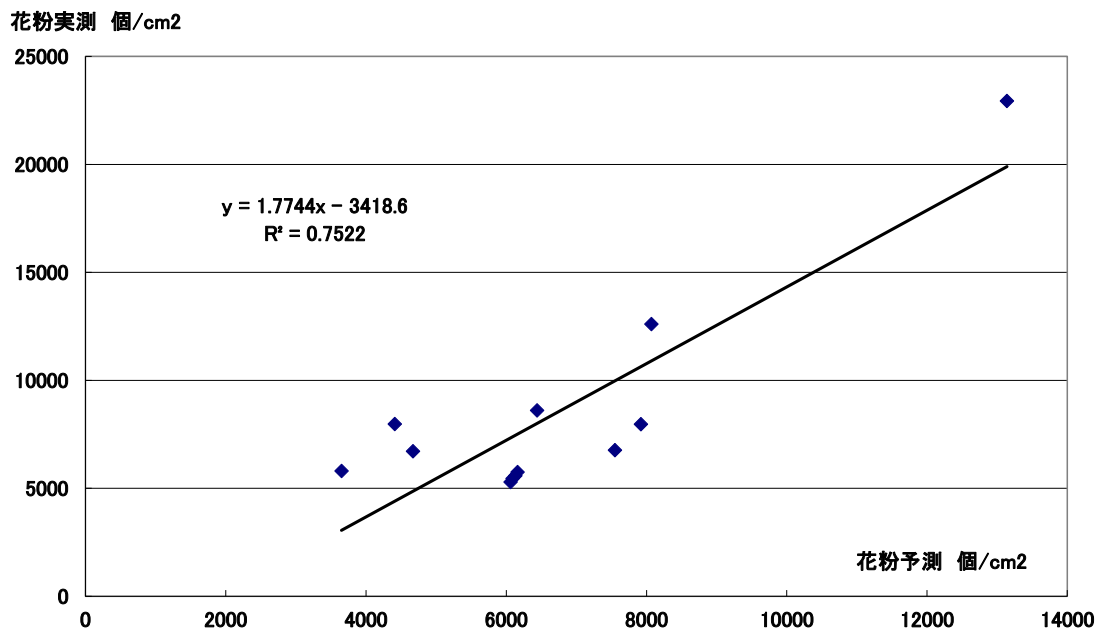
	25年実測	26年予測	10年平均	26年実測	前年比%	平均比%	予測比%
千代田	5051	6060	5363	5291	105	99	87
葛飾	5046	6090	5392	5450	108	101	89
杉並	5406	7550	6690	6765	125	101	90
北	4742	6130	5432	5583	118	103	91
大田	4866	6160	5453	5751	118	105	93
青梅	7790	13140	11645	22937	294	197	175
八王子	5019	7920	6998	7964	159	114	101
多摩	5005	6440	5703	8608	172	151	134
町田	3109	4410	3897	7975	257	205	181
立川	5913	8070	5971	12603	213	211	156
府中	3465	4670	4071	6711	194	165	144
小平	2312	3650	2870	5779	250	201	158

都内23区の5地点では前年比はやや多く、平均比はほぼ平均並み、予測比は90%前後になった。一方、多摩地区では前年比が159%から294%、平均比は114%から211%、予測比では101%から181%と23区に比較して大きな数値であり、ばらつきも大きくなった。23区と多摩地区の花粉数が大きく異なった原因は、2月27日から3月1日に多摩地区限定でスギ花粉の大飛散があったことである。図－3に実測値と予測値の図と相関を、また図－4に実測値から2月27日から3月1日の合計値を除去した数値と予測値の分布を示す。図－3では相関係数0.87で、予測の手法に問題はないとした。図－4で2月27日から28日、3月1日の3日間の実測値の除去した場合の相関係数は0.91になる。2つの図から23区と多摩地区で花粉飛散数に大きな違いが出たのは2月27日から3月1日の多摩地区のみで発生したスギ花粉の大飛散と推定される。

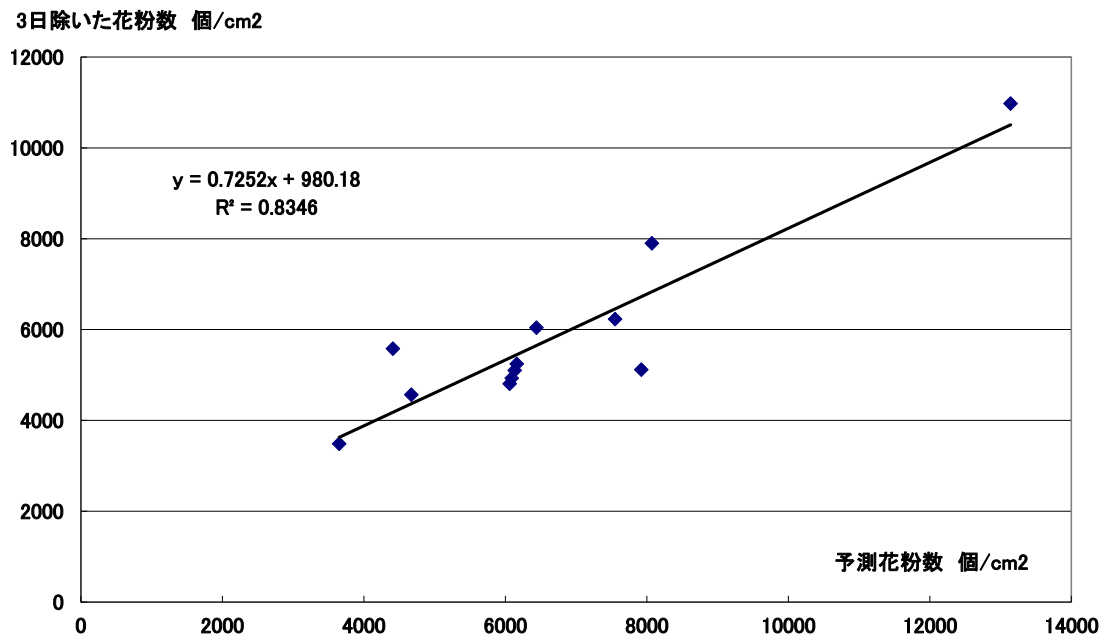
図－5は2月27日から3月1日の3日間の各地の合計花粉数である。図－5から分かるように23区では3日間の花粉数の合計が500個前後であるが、多摩地区では青梅が11958個、立川が4704個、その他の地点もすべて2000個を超えている。2026年春に23区と多摩地区の花粉数に大きな違いが出たのはこの3日間の花粉数の違いが原因であると考えられる。

過去の委員会でも紹介したが週末に限った花粉数は多摩地区の八王子よりも千代田の方が多くなる。2026 年も 2 月 27 日から 3 月 1 日を除いては千代田の方が圧倒的に多くなっている（図—6 参照）。

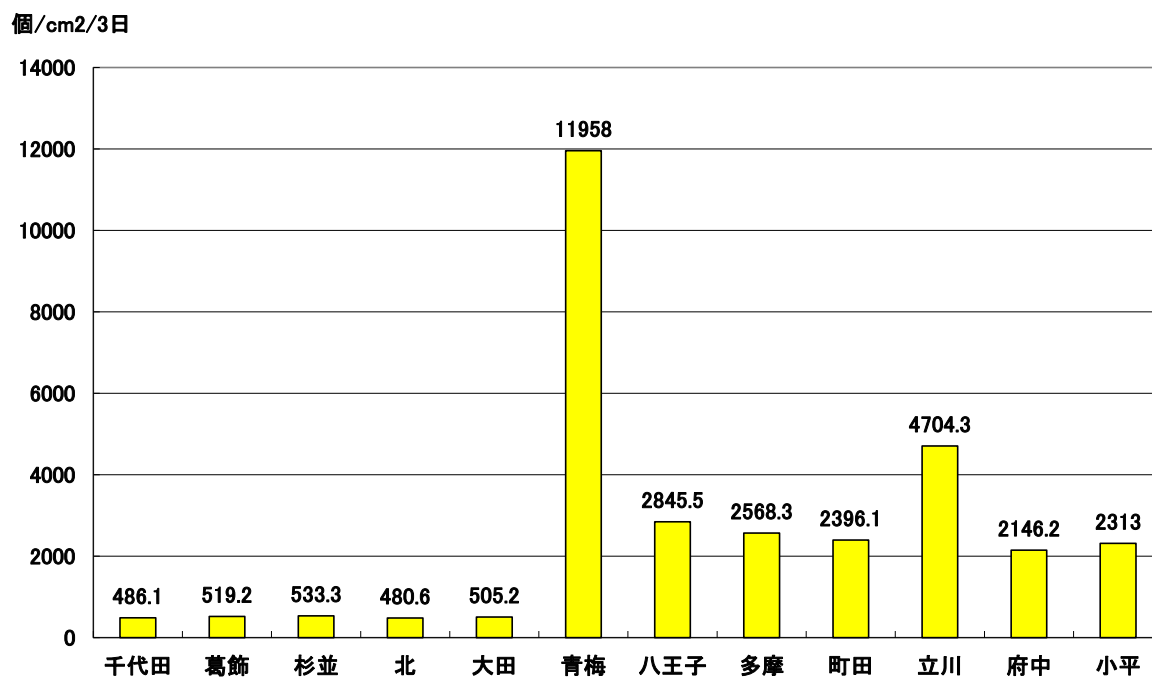
この 2 つの図からも 23 区と多摩地区の花粉数に大きな違いが出たのは、2 月 27 日から 3 月 1 日の飛散状況が 23 区と多摩地区で大きく異なっていたことが原因と分かる。



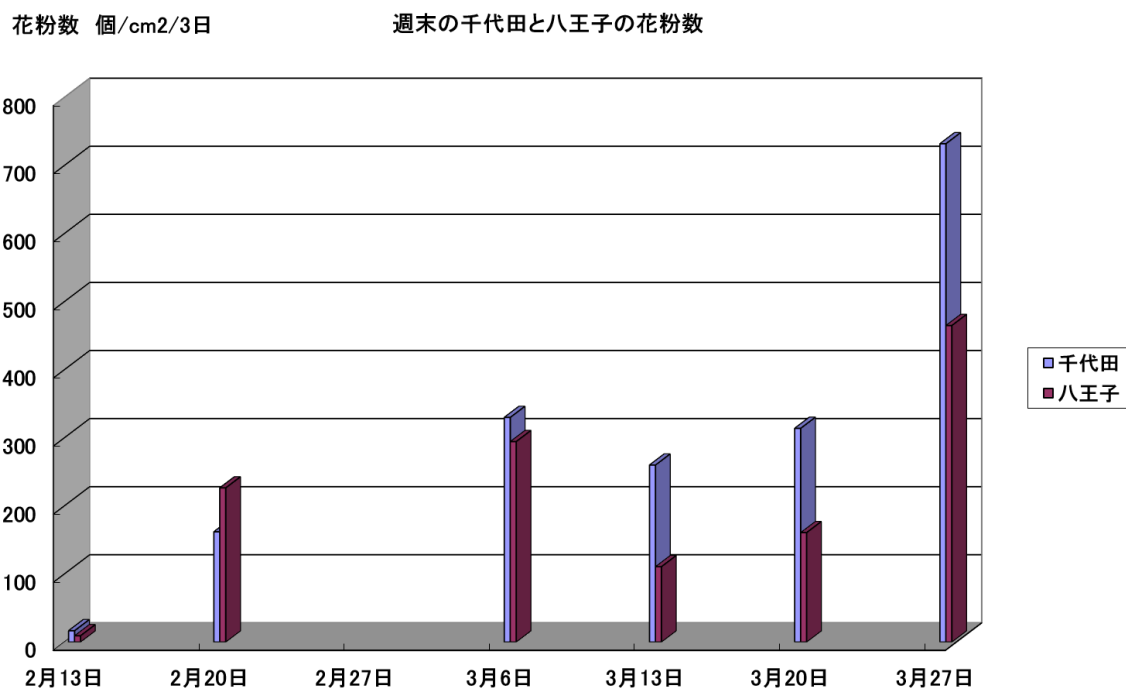
図—3 2026 年春の花粉実測値と予測値



図—4 2026 年春の花粉実測値と予測値
(花粉実測値から 2 月 28 日前後の数値を除去した場合)



図－5 2026 年 2 月 27 日から 3 月 1 日の各地の花粉数



図－6 週末（金～日曜日）の千代田と八王子の花粉数

図－5 および図－6 から 2 月 27 日から 3 月 1 日にかけての期間だけが通常とは異なる状態になっている。この期間の 23 区の平均花粉数は 509 個、多摩地区は 5841 個で 10 倍

以上になっており、青梅と立川を除いた5地点の平均値も2454個で23区の4.82倍になっている。図一6で示したように週末の花粉数は平常では八王子より千代田の方が多くなっており、2026年2月27日から3月1日に多摩地区、特に青梅で非常に花粉数が多く、これが23区と多摩地区の花粉数の差になった。

なお、こうした現象が起きたのは、八王子で村山が実施している空中花粉濃度および多摩地区で1か所毎日スライドを交換しているダーラム花粉数の結果から、2月28日の数時間だけ奥多摩から大量の花粉が多摩地区一帯に広がったためと推定される。一方、23区内では東寄りの風であったために、多摩地区の花粉が23区に輸送されなかったと推定される。

3. 飛散開始日についての検証

令和8年(2026年)1月の委員会では令和7年(2025年)12月以降の気温の推移から、飛散開始日は例年よりやや早くなる予想を作成した(表一4)。その後1月末に、2月上旬の予想気温から都内全域で2月13日か14日という予測に修正した。結果は都内全域が2月13日または14日というものであった(表一5)。

表一4 1月中旬に公表した飛散開始日の予想(令和7年度第2回委員会資料より)

	2025年実測	10年平均	2026年予測
千代田	2月15日	2月15日	2月11日
葛飾	2月16日	2月15日	2月12日
杉並	2月15日	2月15日	2月11日
北	2月24日	2月16日	2月12日
大田	2月15日	2月13日	2月10日
青梅	2月13日	2月12日	2月10日
八王子	2月14日	2月14日	2月10日
多摩	2月14日	2月14日	2月11日
町田	2月14日	2月16日	2月12日
立川	2月14日	2月14日	2月11日
府中	2月14日	2月15日	2月11日
小平	2月14日	2月16日	2月12日

表一 5 1 月末に修正した飛散開始日の予測と実測

	2025年実測	10年平均	2026年予測	2026年実測
千代田	2月15日	2月15日	2月13日	2月14日
葛飾	2月16日	2月15日	2月14日	2月14日
杉並	2月15日	2月15日	2月13日	2月14日
北	2月24日	2月16日	2月14日	2月14日
大田	2月15日	2月13日	2月14日	2月14日
青梅	2月13日	2月12日	2月13日	2月13日
八王子	2月14日	2月14日	2月13日	2月13日
多摩	2月14日	2月14日	2月14日	2月13日
町田	2月14日	2月16日	2月14日	2月13日
立川	2月14日	2月14日	2月13日	2月13日
府中	2月14日	2月15日	2月13日	2月13日
小平	2月14日	2月16日	2月14日	2月13日

表一 6 令和 7 年（2025 年）12 月から令和 8 年（2026 年）2 月の
旬毎の八王子の平均気温と平年差
（気象庁HPより引用）

	期間	平均気温	平年値	平年差
	12月上旬	7.4	7.4	0
令和7年	中旬	5.9	5.7	0.2
	下旬	6	4.6	1.4
	1月上旬	3.5	3.6	-0.1
令和8年	中旬	6.2	3.3	2.9
	下旬	1.9	3.3	-1.4
令和8年	2月上旬	2.9	3.6	-0.7
	中旬	5.5	4.3	1.2

令和 7 年（2025 年）12 月の平均気温は八王子市で平年値より 0.5 度高いが、ほぼ平年並みであった。令和 8 年（2026 年）1 月上旬の平均気温は平年並みの気温であった。1 月中旬は平年よりやや高く、下旬はやや低くなり変動の大きい月であった。1 回目の予測で使える気温データは 12 月から 1 月上旬と中旬前半までに限定される。1 月末に修正の場合は 1 月末までの気温実測値と数値予報による 2 月上旬の気温予測と長期予報による中旬の気温傾向である。

なお、一般に1月1日からの東京の最高気温の積算が400度になると都内で飛散開始になると言われているが、この数値は1980年代後半までのデータで作られたものである。最近10年では、1月1日から飛散開始日までの最高気温の積算はおよそ440度になっている。都内の飛散開始日の予想は、長年大手町の東京管区気象台の気温を用いていたが、気象庁が大手町から虎ノ門に移転することが決まり、これに先立って東京の気象観測が北の丸公園の林の中に移設された。観測する環境が大きく変わったために気象データの連続性が途絶えてしまった。また、温暖化と都市化の影響で冬の気温がかなり上昇していることもあり、都内の飛散開始日の予測は数年前から八王子市のアメダスの気温を用いている。

1月の委員会では入手できる気温データが前年12月と1月上旬の実測値と長期予報による大まかな気温予想だけである。表―6にあるように前年12月は平年並み、1月上旬も平年並みであった。図―7にあるように1月の気温は平年並みかやや高く、2月の気温は平年よりやや高いという予想で、これらのデータから飛散開始は例年よりやや早く、2月10日から12日と予想した。

飛散開始の予測は1月末までの気温データが入手できる1月末日に再度計算して修正することになっている。2月上旬の気温は個人的に予想して1月1日からの最高気温の積算値が440度前後になる日が12日前後との予想結果であったので、都内全域の飛散開始日は2月13日または14日と修正した。予測結果は最初の予測でも誤差は最大でも4日程度、1月末の修正では誤差は1日程度なので問題ない結果であった。



図―7 令和8年(2026年)1月の予想気温



令和8年(2026年)1月24日～2月6日の
予想気温

気象庁 HP より引用